

●● 献穀会年間行事 ●●

四月二十六日	八十八膳献穀会 総会	十一月上旬	芋煮会
五月二十四日	田打祭		研修旅行
五月二十八日	御田植祭	十一月下旬	新嘗祭
八月中旬	注連縄奉製勉強会	十二月中旬	忘年会
九月十五日	飯野八幡宮古式大祭	一月上旬	農立神事
	八十八膳献饌神事	三月中旬	祈念祭
十月下旬	抜穂祭		

●● 入会案内 ●●

飯野八幡宮八十八膳献穀会 会員募集

- 奉耕会員 二十五名
- 賛助会員 五十五名
- 特別会員 八名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様にご入会くださるようお願い致します。



結 yui No.9

発行日 平成16年5月28日  
発行所 八十八膳献穀会

〒九七〇 八〇二六  
福島県いわき市平八幡小路八十四  
飯野八幡宮 社務所内  
〇二四六 二二 一四四四  
メールアドレス ino@jinja.jp  
飯野八幡宮 web  
http://www.noteplan.net/8man/  
発行責任者 飯野 光世

結 yui

八十八膳献穀会 会報 第玖号

●● 卯月八日のお潮とり 佐藤 孝徳 ●●

現在五月の連休になると、市内のあちこちで神社の祭礼が厳粛に(?)執り行われているが、なぜこの時期に行なわれ、それはまたどんな由緒があるのか、最近ではよく分からない面が多くなりつつある。そうした、忘れられて行く祭礼の意義と歴史を垣間見てみよう。

実は日本における暦が、旧暦と称される太陰暦から新暦の太陽暦にかわった後に、祭礼の月を替え単に季節のみを重視して合わせ、旧暦の四月を新暦の五月とし、その結果五月八日となったのであるが、さらに最近になり八日の神日を勝手に休日が続く連休の一日とただけの話である。

本来の四月八日は卯月八日と称し、仏教の開祖釈迦如来の誕生日であるが、この時期に咲きそろう山桜・ヤマブキ・ヤマツツジ・フジに神を飾り、鎮守の神々を招きいれ祝福を受ける日でもあった。

四月八日の祭礼を行う神々にとって最も重要なことは、浜に行き縁故のある磯の岩に御輿をのせて、お潮取りの神事を行うことである。

こうした神事を一般には浜降りの神事と定義しており、その理由として神々は秋から春にかけての冬の期間は山に居られ、この四月八日に里に下りて田の神となって豊饒を与えるとしている。



さらに神が潮水を浴びることによりその力が再生されるともある。

しかし、こうした学説に対し磐城での伝承は異なる。その第一の点は、神々は山から降りるのではなく、海から山の方に向かって行くのだという。だからお潮取りの神事は、神様を浜に迎えに行くわけではなく、神様を浜に迎えないのである。

そうした点を証明するのが各神社の由緒である。例えば中山の佐麻久嶺さまは薄磯の中屋の磯に上がり、中山の地に祀られ、菅波の大國魂社は豊間の浜で拾われ、神託により菅波の村に社を造営している。こうした例はほとんどの社に伝承されている。

こうした御輿のお潮取りの神事は、人々に神社の由緒と特別な御利益話を語り広めながら、途中の地区地区で酒迎えの神事を行いつつ、浜に向かって進んで行った。だからこそ沿道の地域には、神々の由緒と神が与えてくれる御利益とが伝承されてきたのであった。このことが神と人との関係を一層深く結び付けてきたのである。

(いわき市文化財保護審議会副会長)

水の靈威 飯野 光世



五月二十四日「田打祭」が齋行され、今年も田植えの時期がやってまいりました。田打祭には水口に季節の花木が供されました。これは田ノ神に豊作を祈願し、水口をお守りする水神様に水が必要な時期に、必要な量を得られるような雨を願うものです。

水の神は神道では、天之水分神アメノミクマリノカミ、国之水分神クニノミクマリノカミ、天之久比耜母智神アメノクヒシモチノカミ、国之久比耜母智神クニノクヒシモチノカミ、弥都波能売神ミズハノメノカミの神々（水神様）が、それぞれの祭祀の目的により降神され祈願いたします。神様は本より二面性を有しており、豊かな恵みを授けると同時に荒ぶる神として大きな災いをももたらします。それ故古来より水神様をお祀し豊かな水の恵みと、水害などないように多くの祭祀が営まれてきました。

水はすべての生命の源であり一日も欠くことができません。私どもの先人はこの貴重な水を大切にし、その中に神性を感じ禊に現れるような水の靈力ですべての罪穢れを祓う、という信仰にまで高めていくのです。

現代は蛇口をひねると飲料に適した水がふんだんに得られるので、あまりご神徳を意識しないようですが、心したいものです。

感動的な献穀会諸行事 樫村 弘

早乙女に 往時をしのぶ 田植祭

薰風のなか 雅楽響きぬ

平成十五年五月二十八日の私の日付入り市議会手帳には、神饌田での御田植え祭における感想がつかない短歌にして記されております。

私が平成八年に設立された飯野八幡宮八十八膳献穀会の特別会員として入会させていただいたのは十二年四月からですが、氏子区域の中で、農業振興地区である中塩地区でのお正月の農立て神事をはじめ、御田植祭、九月の抜穂祭、十一月の新嘗祭、忘年会、総会などに参加し数多くの尊敬できる方々と交流できることを、いつもながら極めて光栄に感じております。



「ご神前のお供え（神饌）」にも水は必ずお供えされます。しかし、飯野八幡宮八十八膳神饌には水のお供えはありません。そのかわりに「御汁」があります。澄し汁に青さや豆と里芋の具が入っています。御料理屋さんでお膳がだされるときコップに水なんて無いのでこれで良いのかと一人得心しております。

八幡宮には今は使われておりませんが境内東に井戸がありました。また、北にも井戸があり、ここは今でもポンプにより汲み上げ散水用に使っています。自宅の高月にも井戸が自噴しており、「行者井戸」と称されていました。ここは標高四十メートル位の高台ですが、水が確保されていたようです。

今日の「お田植祭」の祝詞の中にも水の憂いが無く、秋の稔りを祈念する詞が奏上されます。共々に水の神様のご神徳に感謝し、豊年満作を祈りたいと存じます。

（飯野八幡宮 宮司）



十五年十月九日の抜穂祭で詠んだ句は「作柄が 気になる年の 抜穂祭 古式ゆかしく 天地に感謝」でした。私自身は、自ら農業を営んだことはありませんけれども、日本人の素晴らしい伝統文化を形成したのは稲作を中心とした農業であると確信しているだけに、特に近年、日本の良さが忘れられがちだけに、献穀会の諸活動は、日本人としての原点を思い起こさせるもので、非常に有意義なものだと思います。

十一月二十八日の新嘗祭では「伝統の 新嘗祭に 参加する 我を誇りと 仲間感謝」という駄作を手帳に記し、恒例の貴重な「ほたる米」を拝受いたし、感動しました。

飯野八幡宮の輝かしい歴史と伝統、国指定の重要文化財の数々などについては、今さら申し上げるまでもなく、内外ともに高名ですが、私は神仏を畏敬し、農業の持つ物心両通の存在感を重視する人間として、本来の八十八膳献穀行事を復活させた飯野八幡宮と大和田長治会長を中心とする献穀会員各位に心から敬意を表したいと思います。

特に、神社本庁より神社振興対策指定神社に選定されたことを機に結成された八十八膳献穀会だけに、農耕文化を見直すためにも、さらに発展充実することを心より願いたします。

（献穀会特別会員・市議会議員）